



Title	盛り場に住む人々にとっての「近代化」 : 大正・昭和初期の名古屋市大須
Author(s)	山田, 朋子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1994, 28, p. 31-46
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56497
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

盛り場に住む人々にとっての「近代化」

— 大正・昭和初期の名古屋市大須 —

山田 朋子

1. はじめに

近代都市を捉える際には、空間の均質化が行われていく一方で、重層的な空間の現出もみられるということに留意していかなければならない¹⁾。つまり空間の均質化を目指す行政によってその方針から外れるものは排除されるが、それは直接都市に住む人々の活動の根絶を意味するわけではなく、一般的にはむしろ新たな空間の活性化の誘因になることのほうが多いといえる。

前稿において筆者は、都市の近代化の過程で近世からの都市が再編されていく際に、盛り場がどのように位置付けられていったかという問題を論じてきた²⁾。これは行政側による位置付けに主眼を置くものであったことから、本稿では盛り場に住む人々の活動に焦点を当てていくことにしたいと思う。なぜなら都市の変容は、行政側の意図と都市に住む人々との相互作用のうちに進んでいくものだからである。

そのような都市の現象を、R. Barthes は「中心としての町」という概念によって次のように捉えている。「中心としての町は、もろもろの既成価値転覆的な力が、断絶の力が、遊戯的な力が活動し遭遇する空間として、つねに生きられる。」³⁾ ここでいう町とは他者との出会いの場であり、本稿で取り上げる盛り場はまさに Barthes のいう「中心としての町」として、

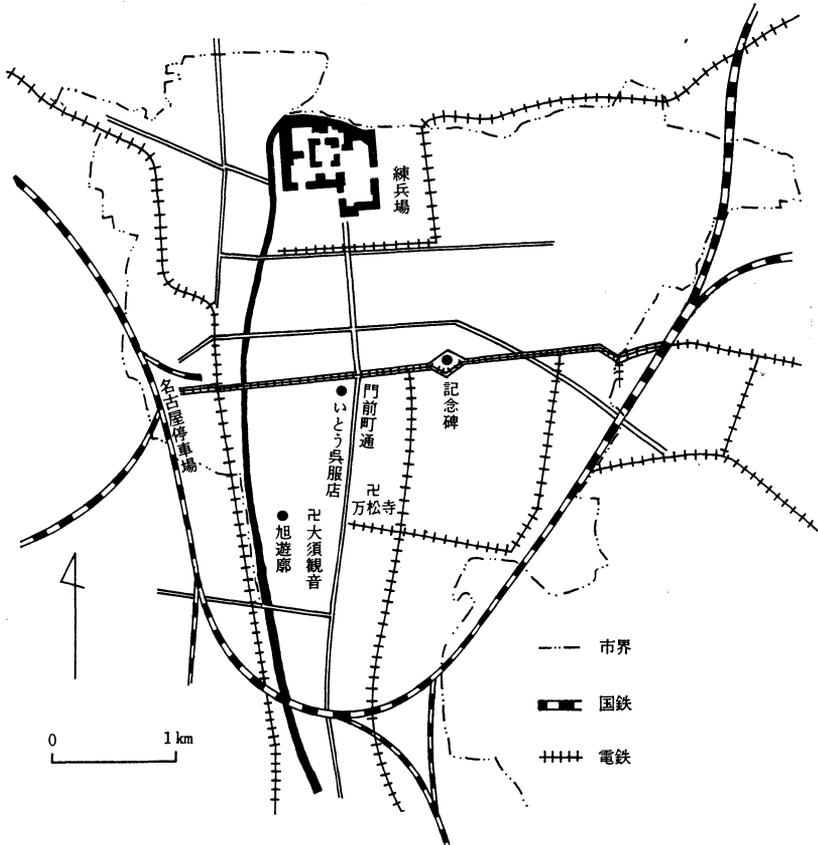
常に様々な力を持ち続ける空間と捉えることができると思われる。

以上のような観点から、本稿では大正・昭和初期の名古屋の盛り場を対象とするが、前稿でも述べたようにこの時期の名古屋の代表的な盛り場は、メインストリートに発展したモダン的な盛り場といえる広小路と、近世からの伝統を持つ庶民的な盛り場である大須という二つのタイプに分けることができる。これらは名古屋が近代都市として発展していく過程で必然的に違う性格の盛り場になったものである。本稿ではこの二つの盛り場のうち、特に後者にあたる大須について触れていくことにする。そして大須が、行政側の計画との関わり合いの中で衰退の危機に脅かされながらも、そこに住む、特に街の活性化に努めた商店街の人々の活動を通してどのように活性化を図っていったかを概観していく。

その際、大須の動向と名古屋市のめざす近代化の過程の文脈との関連性を持たせながら議論を進めていきたいと思う。そしてその中から大須の独自性がどの様に現れてくるのかということを見通した上で、盛り場に住む人々にとっての盛り場の近代化とは何を意味していたのか、その一端を明らかにしていきたい。

2. 盛り場「大須」をめぐる状況

大須は1938（昭和13）年に出された大須案内によると⁴⁾、大須観音とその周辺の通り、更にもその東に存在する万松寺周辺の通りまでを含めた範囲で捉えられていたことがわかる。仁王門から東へ伸びる大須門前の商店街は大須界限の中心的な通りであり、その店舗構成は小間物や洋品類、和菓子類を扱う店や飲食店などで映画館、劇場なども含めて50軒ほどであった⁵⁾。さらに観音境内から南へは金沢町商店街、そして南北の門前町通りを越えて万松寺に至る辺りまで賑やかな通りが伸びていた。これに加えて1923（大正12）年までは大須観音境内裏には旭遊廓が存在し、そのほかに

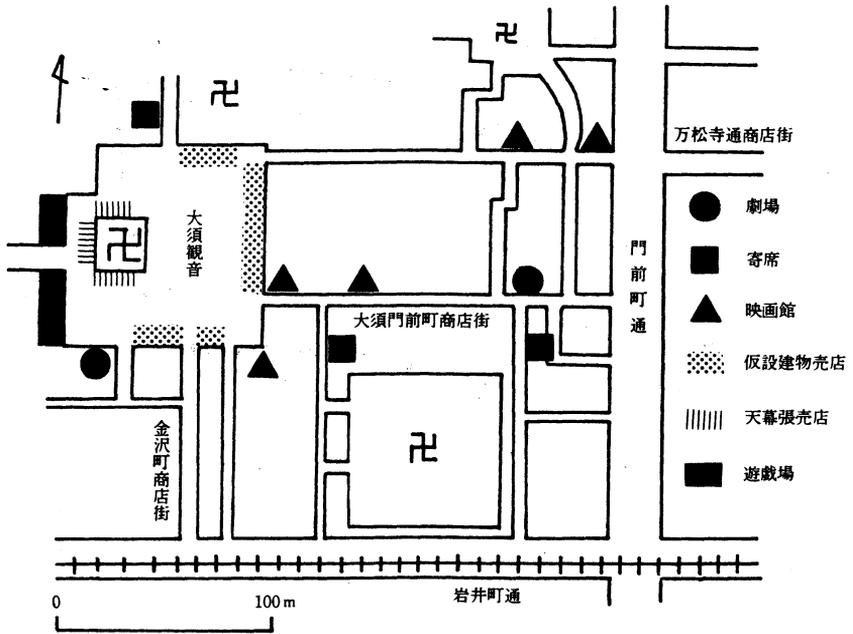


第1図 名古屋市街図(大正元年)

(『大正昭和名古屋市史』より)

映画館、寄席、劇場が点在し、多くの商店とともに歓楽街を構成していた。

1923(大正12)年3月31日、大須観音に隣接していた旭遊廓では、日付が4月1日に変わる午前零時になると、時を知らせる鈴の音を合図に客は追い出された。そして、その後店の者が総がかりで引越しの準備を整え、夜中の間に次の営業地である中村遊廓に移ってゆく人々の姿が見られた⁶⁾。その日は県令によって定められた旭遊廓移転の期日だったのである。



第2図 大須周囲概況〈1935（昭和10）年現在〉
 (『大正 昭和名古屋史』より)

旭遊廓は1876（明治9）年に愛知県当局によって建設を認められた公認の遊廓であり、大須観音の境内の西に開業された。もともと大須観音周辺は、近世期から芝居小屋や露店が立ち並び、大道芸人による見せ物も行なわれるなど、名古屋の城下町の盛り場として賑っていた。明治以降もその賑いは続いており、旭遊廓が開業したことによって更に色町の風情が加わったのであった。旭遊廓の移転当時の規模は、貸座敷数約170軒、娼妓数が1500人ほどであった。

このように旭遊廓の明治初期における開業、そして大正期での移転はどちらも行政側の判断によるものであり、この計画の変更は都市の近代化の過程で行政側にとってはやむを得ず生じたものである。つまり、旭遊廓の

開業を認めた時点では、まだ近代都市名古屋としての計画はほとんど白紙状態であった。とりあえず、街角で客を呼ぶ百花（もか）と呼ばれる娼婦達を一か所に集めてしまいたいという風紀上の理由から、大須観音の隣接地に営業を許可したのであった。しかし1886（明治19）年に笹島停車場が完成して、それに通ずるメインストリートが竣工し発展するに及んで、旭遊廓の地理的な位置が問題となってきたのである。というのは大須は市の中心部に近く、また行政側は大須の盛り場を、その歓楽街的な性格から娯楽の中心として位置付け、交通網なども整備していこうとしていた。そのことから、遊廓の存在は風紀上の問題として懸案事項となっていたのである。結局旭遊廓は、市の美観・秩序を守りたい行政側の思惑通りに市の中心から、郊外へと排除されたということができよう⁷⁾。

遊廓移転の県令が出た当初、移転をめぐる是非について様々な意見が出された中で、大須は遊廓がなくなっても興行を中心として、「却って立派な活動街」⁸⁾として発展していこうという意見もみられた。しかし、結局遊廓がなくなった後の盛り場は芝居や活動写真館の興業が終ると同時にヒッソリとしてしまい、以前のように不夜城を呈することもなくなるなど人出も少なくなり、火の消えたような寂れ方であったという⁹⁾。そのことから大須に店を構える商人達にとっては今後の対策を早急に練らなければいけない状況であった。

3. 発展会設立ブーム

1924（大正13）年2月の名古屋新聞は「発展会行脚」という連載記事を組んでおり、「市内至る所に何々発展会と小売商店の連合団体が出現して来た一寸人通の多いと思うやふな町には必ずある」¹⁰⁾という書き出しで始まっている。「発展会」とは商店街が結束して出来たものであり¹¹⁾、それぞれの発展会設立の共通の目的は昔の賑いを取り戻すことであった。この

ように発展会を作らなければならないほど街が寂れてしまった背景には、それぞれ次のような問題が存在していた。中でも比較的早くから発展会を組織し、その活動を始めていたのは盛り場である大須と広小路に関する商店街である。

栄町発展会は、メインストリートである広小路に面した商店で結成されており、この発展会では特に大資本への対抗ということが切実な問題であった。¹²⁾ それは広小路通りに面する小売り店は昼も夜も店を開いて通りを明るくしているのに対して、オフィスビルが進出してくることによって、昼間は美を競う壮大な眺めであっても、夜になると死の町のようにになってしまうという恐れである。そしてもう一つは百貨店に客を奪われてしまうという危惧である。名古屋にはいとう呉服店、十一屋という2つの百貨店があり、両方とも近世創業の呉服屋が発展したものである。

いとう呉服店は、1910（明治43）年に広小路に進出し、その建築は丸屋根を持った洋館で、一階は名古屋で最初の全面ショーウィンドーであったため特に注目を集めた。また十一屋は、1915（大正4）年に同じく広小路に進出している。大正の中頃から百貨店はそれまでの一部のお得意様相手の高級イメージから、実用品売り場を設けたり、バーゲンセールを行なうなど大衆を相手にするようになっていった¹³⁾。そのような流れの中、名古屋の二つの百貨店は元々安く良い品を多く売ることを信条としていたので、小売店にとって百貨店は強力なライバルとして存在していたわけである。

このような状況の中で発展会の対策は「斯様にして資本の圧迫に対抗せうとして小売商店が連合した発展会は、取敢えず街路を明るくせねばならぬ、よる夜中でも女子供が平気でひとり歩き出来るやうにせねばならぬと、一万有余円を費って街燈をつくった。』¹⁴⁾ とあるように、他の発展会においても、寂れゆく街の窮余策として、第一に街灯を設けて道の整備につとめるところが多く見られる。

大須においては遊廓が移転した年の暮、大須門前町内会の商人達は新たに結束を固めるため、それまでの大須門前大商會を改称して大須大商組合を結成した。前者は日清戦争の戦勝祝賀大売出しを共同で催したのが契機となって作られた集まりだったが、後者は旭遊廓移転後の衰勢を挽回するための結成だった。そして大須の具体的発展対策行事として考え出されたのが「大須変装市場」という企画であった。これは毎月18日の大須観音の縁日の日の大売出しのことで、各店では事前の審査を通り、品質が保証されたものであればどんな店が何を売っても構わず、しかも原価に近い値段での廉売であった。これには朝早くから客が押し寄せ、午前10時頃までには売り切れてしまうほどであり、各新聞紙上でも紹介され毎回の盛況が報じられている。また大商組合が宝生座という芝居小屋と提携して、その期

第1表 第1回大須市場、原価販売品および商店 (1923年11月18・19日)

販 売 品	商 店	販 売 品	商 店
蜜 柑	新 杵 菓子 舗	菓 子	お ふ く 餅
陶 磁 器	大 門 屋 小 間 物 店	蜜 柑	浅 井 玩 具 店
カ マ ボ コ	下 谷 袋 物 店	青 物 類	石 波 志 麵 類 店
書 籍	加 藤 煙 草 店	ビ ー ル 瓶 詰	ライオン食堂
バ ナ ナ	荒 川 眼 鏡 店	あ ら れ	博 品 館
お も ち	野 々 村 商 店	絵 葉 書	青 山 雜 貨 店
荒 物 類	シバニ化粧品店	キ ャ ラ メ ル	實 屋 商 店 店
お 茶	まからんや雜貨店	特 売 帽 子	虎 屋 商 店 店
生 魚 物	や っ こ 食 堂	太 物 類	野 々 部 時 計 店
果 物	伊 藤 洋 物 店	子 供 服、ほ か 一 種	長 谷 川 洋 品 店
柿	高 砂 屋 袋 物 店	干 物 類	鯨 お こ し
特 売 帽 子	鬼 頭	紙 類 一 式	菊 良 刃 物 店
鼻 緒 物	井 上 眼 鏡 店	炭	桔 梗 屋 麵 類 店
果 物	魚 作 楽 器 店	不 明	魚 佳 玩 具 店
麻 裏 草 履	丸 金 小 間 物 店	文 房 具	大 須 バ ザ ー
実 用 鍋	菅 原 屋 洋 品 店	漬 物 類	小 谷 時 計 店
牛 肉 特 売	尾 川 家	パ ン	松 月
甲斐絹徳用切れ	う さ ぎ や 洋 物 店	鯉 節、ほ か 2 種	清 水 洋 物 店
砂 糖	青 柳 羊 羹 店	足 袋、ほ か 1 種	末 廣 屋 履 物 店
菓 子	明 治 屋 雜 貨 店		

間は料金を安くするなど盛り場らしい工夫もみられる。

このように旭遊廓移転のために、以前の賑いが失われつつある街の活気を取り戻そうと始められた企画は、やはり同じような悩みを抱えるほかの商店街へも大きな影響を与えた。それらは大須観音の東側に位置する万松寺通りや、元遊廓のあった洲崎町の商店街などであるが、これらの街ではさらに都市計画の中の交通網からはずれてしまったことによって衰退の危機感を感じたことから団結している。

万松寺通りでは、新たに市電が伸びたことや大須の旭遊廓がなくなったことなどから客足も遠のくようになった。そのうえこの通りでは雨が降ると道がぬかるんで、容易に歩くことができなくなるということから、町内で道路を美しく舗装していこうという提案が生まれ1924（大正13）年3月に、沿道の住民代表が市長へ陳情している¹⁵⁾。

同じように元遊廓のあった洲崎町では、市電岩井町線の開通によって従来洲崎町通りを通っていた人々が、電車を利用するようになって通行人の数が減るのではないかと「全町内の有力者在郷軍人青年団員が血眼となり通行者の吸収に努めて居る」¹⁶⁾と報じられた。そしてその一端として牛馬車を通行止めとし、特別な電燈をともしたり、旗や幕で町内を装飾するというを行なっている。

このように都市の発展に伴って、大資本への抵抗の必要性、近代都市交通網の整備などの都市空間の再編の影響が出てきたことから、従来のままでは街自体が寂れてしまう状況に商店街の人々が気付き、まず人々を吸収するための工夫を始めたのである。この工夫は、今まで述べてきたように商店街の沿道沿いに街灯を設けたり、舗装をするなどといった街路の整備や町内に装飾を施すといったものである。

また栄町発展会で公設市場の存在を非常に意識しているように、「発展会の意向は市の設置してある公設市場を尻からまくし立てる勢ひで廉売す

る」とある。さらに当時の名古屋の小売相場は公設市場ができてから大体標準相場になっていたが、それと競争することによって標準相場を更に引き下げようという意気込みを持っている。こうして安い商品を大量に売ることによって知名度を挙げようという各発展会のもくろみによって、以後市内の各地で廉売デーが催されるのである。

4. 都市の装飾

商店街が上述のように発展会を組織して活性化に努めている一方で、名古屋の商業会議所などでは商品の陳列や、店頭の装飾についての啓蒙活動が始められつつあった。

名古屋商業会議所では1923（大正12年）に「商工業ノ発達ヲ図ルニ必要ナル施設」¹⁷⁾として名古屋広告協会を会議所内に設けている。これは商店の経営管理法、広告術の研究を目的とするものであり、翌年の1924（大正13）年に創立1周年記念事業として店頭装飾競技会を開催している。これは4月10日から19日までの期間で行なわれ、審査員のほかに一般からの投票も募集しており、新聞紙上にその投票用紙が印刷されていた。参加店舗は名古屋市中から応募があり、新聞紙上では「二百余の商店は各自の考究を凝らして我こそはと店頭に全力を集めて目醒ましい程、飾り立てゝあるしお蔭で方方（ママ）の街頭も奇麗になる事であらう」¹⁸⁾と紹介されている。またそれに先立ち3月には、やはり啓蒙活動の一環として「一般店及びウインドウ照明に就て」という演題で講演会が行なわれた。

また5月には愛知県商品陳列所において「商品の陳列装飾研究会」が行なわれ、これはショーウィンドーの装飾競技会という性格のものであった。そしてこれには80店ほどの申し込みがあり、中には東京や大阪などの三越や、いとう松坂屋や大丸などの百貨店からも参考品が届けられるなど非常に反響が大きかったようである¹⁹⁾。新聞紙上でもそれらの陳列に対する批

評が試みられており、商品をいかに陳列するかという行為が、商店街の活性化と平行して模索され始めた時期であるといえるであろう。

店頭の装飾、ショーウィンドーの装飾に加えて看板に関しても同様の試みが行なわれている。同年の7月に東邦電力名古屋支店営業課の主催で、納涼客の多い鶴舞公園において「電燈点滅装飾競技会」が開催された。この競技会の目的は、電燈点滅装置（いわゆるネオン）の普及である。欧米では、広告看板や店頭装飾にこれを応用して盛んに利用されていたが、当時の日本においては一般人の知識も乏しく、工作者もまだ技術的に未熟であった。そのため競技会として開催が試みられたわけである。この競技会には24の装置が出品され、観客は数万人となり10日間の予定が更に5日間延長されて行なわれた。

1926（大正15）年には各発展会が商業会議所を中心として名古屋連合発展会を組織し、中元、誓文払い、年末年始の大売出しを行ない、その際には合同宣伝講演会、競技会などを開催する事が計画された。当初の入会数は35団体で4000軒の商店数に上っていた。また同年には従来の店頭装飾競技会に加え、店舗の上半分を占める屋上看板に関しては、比較的なおざりにされてきたという理由から新しく看板競技会も付け加えられた。これには310軒が参加、店頭装飾競技会には630軒が参加している²⁰。

このようにこの頃は、各種の装飾競技会が目白押しに行なわれている状況で、その参加数も回を重ねるごとに多くなり店頭装飾への関心の高まりが伺える。この店頭装飾の審査基準はまず通行人に購買心を起こすための工夫がいかにされているかを見るために、店の特長の表示、新しい工夫と印象、説明札や値札の使い方が問われる。そして商品の陳列の仕方や通行人に与える感じを見るために、清新味、整頓、照明、色彩、背景への配慮が審査対象となっている。

このような基準に対して、一方では美しい店頭装飾にするための技術を

身につける講習会が開かれており、事前に「陳列窓講習会の教材」が配られた。この教材から、当時どのようなことが教育されたかを知ることができるが、その内容は「飾窓陳列の着眼点」と「飾窓の照明法」についてである²¹⁾。それによると洋品雑貨、化粧品、食料品、菓子などをどのように並べたらいいか説明されており、同一系統のものは一緒にすること、年中行事には特別な装飾をすること、また、季節感を出すための工夫などのアドバイスから、床の上ばかりにおかないで陳列台を利用すること、詰め込み主義を避けること、また陳列ケースのガラスや内部はきれいにしておく事といった細かな注意まで載っている。他に商品の背景への配慮も説かれており、呉服の陳列に関しては調和する色まで書かれている。

この教材は最後に、店頭装飾の効用について次のような言葉で結んである。「看板で店を知らせ、街路照明で人を集め、飾窓で商品を披露し店へ客を吸収する、そして店内照明の下で説明を充分にして売りさばく」つまりこれが近代的な商店の商売方法として教育され定着していったわけである。そして装飾に関する様々な競技会を繰り返す事によって競争心・向上心を高め、そのことが個々の店の美化から街路の美化へそして都市の美化へとつながっていくと考えられたのである。またこの頃から、都市計画の中で建築物の高さや色彩を統一する美観地区の指定についても考えられ始めている²²⁾。

個々の店の美化から街路の美化へという考えをあらわすものが1928（昭和3）年に行なわれた街路装飾競技会である。これは各商店街単位で装飾を競うものであり、ちょうど昭和天皇の御大典行事の行なわれた年で、この競技会もその行事の一環としてのものであった。そして市内においては本町通りが新たに御幸通りとして整備され、装飾・美観にも注意がはられるなど都市の美観が取り沙汰される時期でもあった。

5. 盛り場大須の近代化

先程述べたように、他の発展会設立の導火線的な役割を果たした大須大商組合では、ほかの発展会の動きと同様に街路灯を設置して道の整備を行ったり、さらに組織を強化していこうと新たな企画が考えだされたりした。その企画とは、月刊誌の発行と、毎月ないし隔月1回ずつの通俗講演会を開くことである。月刊誌は「大須タイムス」と呼ばれ、大須を中心にした付近の沿革・現況などを紹介、宣伝し関係各店の広告に利用することを目的としたもので、通俗講演会は、組合員および店員の常識・修養に資するためのものであった。これらは大須の存在を広め、店員の質を高めることによってさらに組織の向上、活性化を目指したものだと思えることができよう。その中では前述した商品陳列や、装飾などの教育も、商業会議所の企画と平行して取入れられたと思われ、装飾競技会の審査で上位に入った店の中には大須門前の店も見出すことができ、それらの店ではネオンの看板を上げたり、店内のウィンドーには蛍光灯をつけるなどしていた²³⁾。

このような商店街としての活動は、初めのうちは大須周辺の個々の商店街での動きであったのが、大須観音を中心とした一つのまとまった動きがみられるようになってくる。それが1928（昭和3）年に開かれた「大須境内建て直し大評定」である。これは大須観音付近の十ヶ町の30人の委員が集まって、「名古屋の中心」である大須をよりよくし、その地位を保ち続けるための対策を話し合ったものである。そしてそのために大須観音の境内を「昭和年代の装い」に改善することが話題の中心となった²⁴⁾。

改善の内容に対する意見としては、境内の露店と仮設物を取り払って本堂前を公園らしくし、周囲に昭和年代にふさわしい近代的な食堂を立てるなどという案が出された。そして取りあえずは、本堂の裏の玉ころがしの店をモダン化すること、宮島のような朱塗丸柱の回廊をめぐるすことをま

ず実現させていく事になった。さらに大須観音の墓地を移転させてその跡地へ設備を整える事、境内に通じる新しい道を作る事などの計画の実行が考えられた。こうして商店街から集まった委員たちによって、名古屋の中心の大須を具体化するために「大須中心会」が組織されたのである。つまりここで議論されたのは、周囲の商店街は店頭の装飾をしたり街灯を取り付けたりして時代に合わせ、近代化を図ってきたが、その中心となる大須観音が旧態依然としたままでは恥ずかしいので、大須観音の境内も時代にふさわしく近代化をしていかなければならないということである。そして、この時代にふさわしいとは境内を公園のようにしてモダンな建物を建てる事だと考えられていた。こうして、大須という街のシンボルともいえる観音境内を近代化する取組によって「名古屋の中心としての大須」という自分達の街という意識が具体的に強められていったと考えられる。

このような意識の強化は、大須内外のイベントが企画されていくごとに見られていき、例えば大須観音の大開帳や汎太平洋博覧会などは、その契機となっている。そして大須全体の中でのまとまりと共に、個々の商店街は、各街でデザインの違った街路灯を設置することによってその個性の演出を行い²⁵⁾、それが多様な顔を持つ大須としての魅力を引き出す一因ともなっていたと思われる²⁶⁾。

大須から旭遊廓がなくなったことは、大須にとって大きな損失ではあった。しかし、それを補う形で企画されたことが活性化を促し、アイデンティティの強化となっていったという見方もできるのではないだろうか。

6. おわりに

行政側の遊廓移転を契機に始まった大須の再生の動きは、市内の各地に影響を与えた。そしてその動きが更に近代的な商店の陳列や装飾の方法と絡み合って、活性化の手段として近代的な装飾が欠かせないものとなって

いく。その流れの中で大須の商店街も同様に、近代的な装飾を施すことによって整備が進みつつあり活性化の機運が高まっていた。そして大須観音境内の近代化の問題が持ち上がり、大須では自分たちのシンボルを近代化の核にすることによって、大須という街全体の活性化のための強いまとまりが実現していくのである。

ここで注目された近代化とは、時代の文脈の中で人々の心をつかんでいくこととつながり、美観の問題が関係してくる。しかし大須では装飾による美観とは、行政の目指す統一の取れた美観とは別の意味を持っていたようである。それらは恐らくネオンや派手な看板が立ち並ぶ華美な程の装飾であったのであろう²⁷⁾。そして各街の街灯にも見られたように、大須は統一と個性がぶつかり合い、それが街の魅力とつながりながら大須観音によって支えられた街なのである。

大須はメインストリートの広小路に対して、大須観音を中心として店が立ち並び、露天商や大道芸人も多数いて、芝居小屋では歌舞伎が上演されるなど近世以来の伝統的な盛り場として位置付ける事も可能である。しかしそのような街の雰囲気の中でも、そこに住む商人たちは時代の流れに対して敏感に動き、自分たちの街も近代化していこうと動くのである。

都市というのは静止していない。そこに住む人々が常に時代とともに前進させていくものなのである。とくに盛り場はそこに住む人々にとっては、自分たちが作り上げていく愛着のある街なのである。

注

- 1) 成田龍一「近代都市と民衆」成田龍一編『近代日本の軌跡 9 都市と民衆』吉川弘文館 1993 21頁。
- 2) 拙稿「都市の近代化における「盛り場」の位置付け — 名古屋の事例から —」『日本学報』13 1994 123~145頁。
- 3) R. Barthes, “Sémiologie et urbanisme” *l'architecture d'aujourd'hui*

- 1971 (邦訳は篠田浩一郎訳 「記号学と都市の理論」前田愛編『テキストとしての都市』学燈社 1984 47~61頁)。
- 4) 大大須振興会『日本の大須』1938。
 - 5) 商工省商務局「小売業改善資料第14号名古屋市内商店街に関する調査」1936 この調査によると明治年間から開業している商店が半数近い。
 - 6) 平野豊二郎『大須大福帳』双輪会 1980 190~191頁。
 - 7) 近世都市から近代都市への転換期の都市の「浮動性」について、橋爪氏が大阪の仮設興行街に注目して論じている。(橋爪紳也「都市と見世物小屋の近代」『明治の迷宮都市』平凡社 1990 5~34頁)。
 - 8) 『名古屋新聞』1919 (大正8)年4月22日。
 - 9) 平野前掲書 274頁。
 - 10) 『名古屋新聞』1924 (大正13)年2月21日。
 - 11) 藤田貞一郎「日本資本主義発達史における国内商業の変革過程」『歴史リア』97 1982。藤田は本論文において、東京・大阪・京都に、異業種の商人の団体組織が確固としてあらわれるのは1907 (明治40)年ころからと指摘している。
 - 12) 前掲の拙稿においても、この問題について若干触れている。
 - 13) 初田亨『百貨店の誕生』三省堂 1993 174~179頁。
 - 14) 『名古屋新聞』1924 (大正13)年2月21日。
 - 15) 名古屋市では大正12年度以来、主要道路の舗装工事を行っているが、翌年度の予定工事の中に万松寺通りが入っていなかったため、住民が市長を訪れて陳情した(『名古屋新聞』1924 (大正13)年3月31日)。
 - 16) 『名古屋新聞』1924 (大正13)年2月26日。
 - 17) 『名古屋商業会議所月報』205号 1924年。
 - 18) 『名古屋新聞』1924 (大正13)年4月8日。
 - 19) 『名古屋新聞』1924 (大正13)年5月14日。
 - 20) 『名古屋商業会議所月報』221号 1925年。
 - 21) 名古屋広告協会『陳列窓講習会の教材』1930。
 - 22) 『名古屋新聞』1926 (大正15)年1月13日。
 - 23) 平野前掲書 315頁。
 - 24) 『名古屋新聞』1928 (昭和3)年10月3日。
 - 25) 大西行雄 嘉田由紀子「町の風景 湖北長浜を訪ねて」(古川彰 大西行雄編『環境イメージ論』弘文堂 1992 121~145頁)では、現代都市長浜における商店街の街灯についての調査から、「複雑に展開する多彩な街灯の風景は、ガチャガチャしたうるさい風景であると同時に、小さな地域単

位にアイデンティティをもちながら競い合ってその環境を維持している私たちの日本の街の原風景でもあるのだ。」と述べられている。

- 26) 前掲書『日本大須』の中では、大須周辺の各商店街の街灯を写真掲載し、商店街の紹介を行なっている。
- 27) 1940（昭和15）年頃には、盛り場の美観について検討がされている。（金井静二「名古屋大須の計画」『都市美』30 1940）。

付記

本稿の骨子は第36回地理思想研究部会、第50回歴史地理研究部会（共催）（1994年7月2日於：大阪市中央公会堂）で発表した。

橋爪紳也氏には、関連文献の提供・御助言を頂いた。記して御礼申し上げます。
（大学院後期課程学生）